

2025年1月の総評に代えて

○林 桂 ○

● 桜 望子 ● (山形県 30歳)

死んだ母の誕生日だったなあと
ふと思い出す
冬の洗濯物の冷たさ

【評】命日は記憶に残り、近づけば毎年蘇る。しかし、亡くなった母の誕生日となると覚束ない。誕生日を祝ってもらつても、遂に祝った記憶がない身には尚更である。冷たくなった冬の洗濯物の感覚でふと思い出す母の誕生日。背後には亡くなつた母への複雑な思いがあるのだろう。

● さ い う ● (石川県 19歳)

ぼにゅぼにゅと
うさぎの耳
を揉みながら
もくれんの花ひらく日を待つ

【評】思えば、木蓮の花びらは兎の耳に似ていなくもない。兎の耳を触りながら、

連想したのかもしれない。「ぼにゅぼにゅ」に心許しきれた兎の姿が描かれる。大きな木蓮の花びらも待春の思いを伝えるのに効果的だ。

● 田崎森太 ● (東京都 73 歳)

生類に淋しみの令寒の雨

【評】「生類憐れみの令」のパロディー。生類が持っている本質は「淋しみ」にあると喝破している。寒の雨の取り合わせも効いている。

● 小川いなせ ● (茨城県 22 歳)

教室でいちばんまぶしい席にいる
打ち上げにぜつたに来ないひと

【評】眩しいのは、「作者」の視線が生むものだろう。気になる存在ながら、群れずに孤高の立ち居振る舞いの人なのだろう。

● 橋口 諒介 ● (東京都 18 歳)

つまらないくらいに
海が広がっていました
僕は高校生です

【評】「つまらないくらいに」がいい。最近は聞かないけれど、高校生に三無主義とか五無主義とか言われたことがあった。その中には無感動、無関心があって、当世の高校生の特徴とも言われた。しかし、この作品には、その深層を掘るような趣きがある。「くらいに」か。もっと深い心動かされるものを求めているから、世界がつまらく見えているのかもしれない。

●付玉 薄荷●(埼玉県 27歳)

鍋を囲んで 蟬の静けさ

【評】鍋物は冬期の食べ物と言つていいだろう。鍋物を食べようとするときに、夏の生き物である蟬の声はない。「蟬の静かさ」と蟬の気配のなさを言う。当然と言えば当然の季節ながら、あえて言挙げすることで感じるものが生まれる。

●ムクロジ●(群馬県 17歳)

月冴えて二段ベッドに木の梯子

【評】子どもの兄弟部屋か、バックパッカーなどの利用する簡易な宿の様子か。「木の梯子」に焦点を移して結びながら、映像を鮮やかにする。こんな空間でも月冴えた夜には、独りもの思うことはできるのだ。

● 高橋 泰地 ● (大分県 23 歳)

捨てられた写真の束の
老人は笑顔
生活のキャパシティ

【評】「生活のキャパシティ」に思い巡らせる。断捨離がよいこととして流布するが、それは生活のキャパシティの保持のためだろう。ここで捨てられている写真の老人は、祖父か曾祖父などのものだろうか。家族の記憶に繋がるものまで断捨離の中に入ることへの違和感が、「作者」の心を動かしたのだろう。

● 石村 まい ● (兵庫県 25 歳)

おろしたての
パフスリーブのふくらみに
ひかりをいれて象を見にゆく

【評】幼いときの思い出だろう。よそ行きの服を着て、動物園の象を見にいったのだ。「パフスリーブのふくらみに／ひかりをいれて」に、幼い心踊りが表現されている。

● ほしはかせ ● (群馬県 59歳)

雪降りの父の揚げ耳パンが好き

【評】父親は、降雪で働きに行けなくなつたのかもしれない。パンの耳を揚げて、おやつを作ってくれたのだろう。優しいイクメン。でも、何度も何度も同じような経験をしたというのではないだろう。特別な思い出である。だから今も残る父の姿なのだろう。

● 伊東マンション ● (東京都 32歳)

あたしだって
母さんみたいに不安なく
産んでおうちにいたかった
日本死ね

【評】父親が外で働き、母親は家で家事をするという家族モデルが壊れて久しい。その矛盾は、個々の家族が負う問題として顕在化したままである。金の卵の農村の若者を食べ尽くし、農村に労働力が枯渇すると、次は家庭に眠っていた女性を労働力とするようになったのが現在である。簡単な話、男一人の収入で家庭を維持するのが難しくなればよいだけの話である。「日本死ね」は、2016年に話題となった「保育園落ちた日本死ね」からの引用。働かねばならないのに、子どもを預ける環境が整っていない現状を批判した言葉。作者も、母の世代と違う困難な子育ての環境にあるのだ。

● 鳥山 秀行 ● (千葉県 39歳)

鈴蘭の
毒で
眠る
白金のような娘

【評】どこか民話、童話めいているが、どこかに出典があるかどうか知らない。白雪姫はリンゴ、オーロラ姫は糸車の針だった。ただ、可憐なスズランの花には毒があり、それに触れた娘が眠りに落ちた

というのはそれなりの美しさがある。「白金のような」にもスズランの印象が被る。

●ともよ●（北海道 64歳）

触角に露
夜ごと
架けかえられる
草の橋

【評】これも童話めいている。秋の虫の長い触角に夜露があり、露の降りた草の葉は、毎夜毎夜しなり、草の橋をつくる。一瞬、村上炳魚の句集『夜雨寒蛩』を連想した。蛩はコオロギのこと。

●白鳥 陽太●（神奈川県 20歳）

カラシニコフ銃を抱いて
小麦畠で眠る
電波の搖籃
飛行機の叫び声
両親の面影

【評】小麦畠に塹壕を掘り、潜んでいる口シア兵の姿を想いえがいているのだろうか。戦前に戦火想望俳句というのがあった。また、現在も上田玄には「撃チテシ止

マム／父ヲ／／父ハ」がある。敵味方を超えて、兵卒個々人は権力の犠牲者である。文学は、権力に与せず、ここに寄り添うものだろう。

● 沼谷香澄 ●（千葉県 61歳）

百人でこの世の桃を食い尽くす

【評】この「百人」は何の比喩、または象徴なのだろうか。「この世の桃」もしかり。読者的心に問い合わせはじまる。

● 澤井 和水 ●（東京都 47歳）

着ぐるみじゃないと言わされ森敦

【評】着ぐるみに入っている人は、着ぐるみのキャラクターになりきる受け答えがお約束である。「言わされ」はそういうことだろう。しかし、森敦への飛躍の文脈が分からぬ。分からぬけれど面白い。キャラクター対応を「盛り厚し」と見たことから連想して森敦が出て来たのかとも思ったが、これは悪しき邪推読みだろう。

● 湯島　はじめ ● (東京都 32 歳)

花野とは
たましいだけでゆくところ

【評】花野はどこか浮き世離れしたイメージがある。冥界を彷徨った経験者の中には、そこはお花畠だったと言う人もいる。ここでは、そんなお花畠をイメージさせる。

● ケムニマキコ ● (京都府 37 歳)

公園にすごい猫背の神がいて
あらゆる鳩を許さなかった

【評】「擬神」化されているが、猫背の神は、現実世界では猫そのものだろう。公園の鳩を狩って生きる野良猫。しかし、神である。神という存在を考えさせる。神は正義ばかりではない。邪悪な神もいる。何が神格化させるのか。そんなことを考えさせる。